

1

解説

(1) 直線 l と y 軸が平行であるとする。

このとき、直線 l は方程式 $x=a$ とおける。直線 l と点 A の距離を d_1 、直線 l と点 B の距離を d_2 とすると、条件から $d_1+d_2=1$

一方

[1] $a < -1, a > 1$ のとき

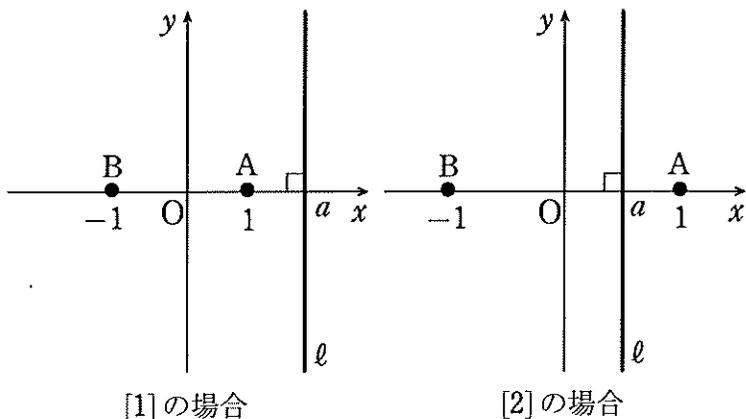
$$d_1+d_2 > 2$$

[2] $-1 \leq a \leq 1$ のとき

$$d_1+d_2 = 2$$

したがって、どちらの場合も $d_1+d_2=1$ に矛盾する。

よって、直線 l は y 軸と平行でない。



[1] の場合

[2] の場合

(2) 線分 AB と直線 l が交わる点を $(p, 0)$ ($-1 \leq p \leq 1$) とする。直線 l の傾きを m とすると、直線 l の方程式は $y=m(x-p)$ すなわち $mx-y-mp=0$ とおける。

$$d_1 = \frac{|m-mp|}{\sqrt{m^2+1}} = \frac{|m||1-p|}{\sqrt{m^2+1}}$$

$$d_2 = \frac{|-m-mp|}{\sqrt{m^2+1}} = \frac{|m||1+p|}{\sqrt{m^2+1}}$$

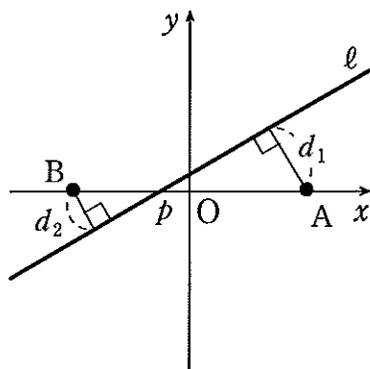
$-1 \leq p \leq 1$ であるから

$$d_1 = \frac{|m|(1-p)}{\sqrt{m^2+1}}, \quad d_2 = \frac{|m|(1+p)}{\sqrt{m^2+1}}$$

これらより $d_1+d_2 = \frac{2|m|}{\sqrt{m^2+1}}$

$d_1+d_2=1$ であるから $\frac{2|m|}{\sqrt{m^2+1}} = 1$ よって $2|m| = \sqrt{m^2+1}$

両辺を 2 乗すると $4m^2 = m^2+1$ これを解くと $m = \pm \frac{1}{\sqrt{3}}$



(3) (2) と同様に、直線 l の方程式は

$$mx-y-mp=0 \quad (p < -1, p > 1) \text{ とおける。}$$

ここで、2点 A, B の y 軸に関する対称性により、

$p > 1$ としても一般性は失わない。

原点と直線 l の距離を d とすると

$$d = \frac{|-mp|}{\sqrt{m^2+1}} = \frac{|m|p}{\sqrt{m^2+1}}$$

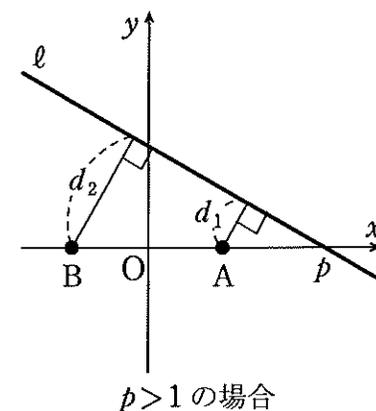
一方 $d_1 = \frac{-|m|(1-p)}{\sqrt{m^2+1}} = \frac{|m|(p-1)}{\sqrt{m^2+1}}$

$$d_2 = \frac{|m|(1+p)}{\sqrt{m^2+1}}$$

これらより $d_1+d_2 = \frac{2|m|p}{\sqrt{m^2+1}}$

$d_1+d_2=1$ であるから $\frac{2|m|p}{\sqrt{m^2+1}} = 1$ したがって $\frac{|m|p}{\sqrt{m^2+1}} = \frac{1}{2}$

よって $d = \frac{1}{2}$



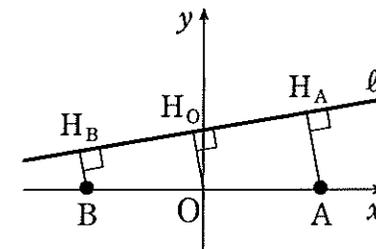
$p > 1$ の場合

別解 (3) 点 A, B, O から直線 l に下ろした垂線の足を H_A, H_B, H_O とする。四角形 AH_AH_BB は台形となる。

また、 $AO=BO=1, AH_A \parallel OH_O \parallel BH_B$ であるから、台形の中点連結定理により

$$OH_O = \frac{1}{2}(AH_A + BH_B)$$

$AH_A + BH_B = 1$ から $OH_O = \frac{1}{2}$



2

解説

(1) $y = \frac{1}{2}x^2 - 3a, y = -\frac{1}{2}x^2 + 2ax - a^3 - a^2$ から y を消去して整理すると

$$x^2 - 2ax + a^3 + a^2 - 3a = 0 \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

$y = \frac{1}{2}x^2 - 3a, y = -\frac{1}{2}x^2 + 2ax - a^3 - a^2$ が異なる 2 点で交わるから、 x の 2 次方程式

式 ① は異なる 2 つの実数解をもつ。

よって、① の判別式 D について $D > 0$

$$\frac{D}{4} = a^2 - (a^3 + a^2 - 3a) = -a^3 + 3a = -a(a^2 - 3) > 0$$

$a > 0$ であるから $a^2 - 3 < 0$ これを解くと $-\sqrt{3} < a < \sqrt{3}$

$a > 0$ であるから $0 < a < \sqrt{3}$

(2) 2次方程式①の解を α, β ($\alpha < \beta$) とおくと

$$\begin{aligned} S(a) &= \int_{\alpha}^{\beta} \left\{ -\frac{1}{2}x^2 + 2ax - a^3 - a^2 - \left(\frac{1}{2}x^2 - 3a \right) \right\} dx \\ &= -\int_{\alpha}^{\beta} (x-\alpha)(x-\beta) dx = \frac{1}{6}(\beta-\alpha)^3 \\ &= \frac{1}{6}\{(\beta-\alpha)^2\}^{\frac{3}{2}} = \frac{1}{6}\{(\alpha+\beta)^2 - 4\alpha\beta\}^{\frac{3}{2}} \end{aligned}$$

ここで、解と係数の関係から $\alpha + \beta = 2a, \alpha\beta = a^3 + a^2 - 3a$

$$\text{よって } S(a) = \frac{1}{6}\{(2a)^2 - 4(a^3 + a^2 - 3a)\}^{\frac{3}{2}} = \frac{1}{6} \cdot 4^{\frac{3}{2}}(3a - a^3)^{\frac{3}{2}} = \frac{4}{3}(3a - a^3)^{\frac{3}{2}}$$

(3) $f(a) = 3a - a^3$ とおくと $f'(a) = 3 - 3a^2 = -3(a+1)(a-1)$

$f'(a) = 0$ とすると $a = -1, 1$

$0 < a < \sqrt{3}$ における $f(a)$ の増減表は右のようになる。

よって、 $f(a)$ は $a = 1$ のとき最大値 2 をとる。

$f(a)$ が最大となると、 $S(a)$ も最大となる。

$$S(1) = \frac{4}{3} \times 2^{\frac{3}{2}} = \frac{8\sqrt{2}}{3}$$

よって、 $S(a)$ は $a = 1$ のとき最大値 $\frac{8\sqrt{2}}{3}$ をとる。

a	0	...	1	...	$\sqrt{3}$
$f'(a)$		+	0	-	
$f(a)$		↗	2	↘	

3

解説

(1) $x > 0, y > 0$ より、 $xy > 0$ であるから

$$\frac{y}{x} + \frac{x}{y} - 2 = \frac{y^2 + x^2 - 2xy}{xy} = \frac{(x-y)^2}{xy} \geq 0$$

$$\text{よって } \frac{y}{x} + \frac{x}{y} \geq 2$$

等号が成立するための条件は、 $x = y$ である。

(2) [1] $n = 1$ のとき

$$\text{左辺} = a_1 \cdot \frac{1}{a_1} = 1, \text{右辺} = 1^2 = 1 \text{ より、成り立つ。}$$

[2] $n \geq 2$ のとき

$$\begin{aligned} &(a_1 + \dots + a_n) \left(\frac{1}{a_1} + \dots + \frac{1}{a_n} \right) \\ &= a_1 \left(\frac{1}{a_1} + \dots + \frac{1}{a_n} \right) + a_2 \left(\frac{1}{a_1} + \dots + \frac{1}{a_n} \right) + \dots + a_n \left(\frac{1}{a_1} + \dots + \frac{1}{a_n} \right) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} &= \left(1 + \frac{a_1}{a_2} + \dots + \frac{a_1}{a_n} \right) + \left(\frac{a_2}{a_1} + 1 + \dots + \frac{a_2}{a_n} \right) + \dots + \left(\frac{a_n}{a_1} + \frac{a_n}{a_2} + \dots + 1 \right) \\ &= n + \left(\frac{a_1}{a_2} + \frac{a_2}{a_1} \right) + \dots + \left(\frac{a_i}{a_j} + \frac{a_j}{a_i} \right) + \dots + \left(\frac{a_{n-1}}{a_n} + \frac{a_n}{a_{n-1}} \right) \end{aligned}$$

(ただし、 $1 \leq i < j \leq n$)

ここで、 $1 \leq i < j \leq n$ を満たす自然数の組 (i, j) は ${}_n C_2 = \frac{n(n-1)}{2}$ 個ある。

また、 $a_i > 0, a_j > 0$ であるから、(1)より

$$\frac{a_i}{a_j} + \frac{a_j}{a_i} \geq 2 \quad (\text{等号成立は } a_i = a_j \text{ のとき})$$

$$\text{よって } (a_1 + \dots + a_n) \left(\frac{1}{a_1} + \dots + \frac{1}{a_n} \right) \geq n + 2 \times \frac{n(n-1)}{2} = n^2$$

$n = 1$ のとき、等号は常に成り立つ。

$n \geq 2$ のとき、等号が成立するための条件は $a_1 = a_2 = \dots = a_n$

参考 一般に、次のシュワルツの不等式が成り立つ。

$$(x_1 + x_2 + \dots + x_n)(y_1 + y_2 + \dots + y_n) \geq (x_1 y_1 + x_2 y_2 + \dots + x_n y_n)^2$$

$x_i = a_i, y_j = \frac{1}{a_j}$ とすると、(2)の不等式になる。